向い、諸費を節約して買い蒐めた必要な文献をノートし、殆ど讀み放す事はなかつたとの事である。それでこそ約五十册に上るノート、又百四十余册の貴重な文献を遺す事になつたのであろう。桑山君自身、まさかあの様な大惨事で短い一生を終えるとは夢想だにしていなかつたに違いない。是れからの長い學究生活を夢みて、一歩一歩知識を廣く、且つ確かなものとする爲に、事ある毎にノートを作り、自身の大成を計画していつたに違いない。洵に惜しむ可き同君の將來であつた。

圖書館での彼を思う

同期生（宮城）　鮎田龍全

薄暗いひつそりしたあの片隅に何時も本と首つぴきして頑張つて居つた今日も来ているかな、こんな時は何時でも傍に寄つて來て道元禪師の思想について話をした、最後になると特長のある體付で「どうも史料がないんですよ、曹洞宗の民衆化して行く姿を見たんですが、そうすると道元禪師そのものの思想に入つて行かなくてはならないし何か御存知ありませんか」こんな會話が數回あの莊重な部屋の片隅に閉込められているのです「どうも私も支那の弘思、神秀らの唐代禪について一寸見たりしますが思想方面には觸れていないんで」「若し何かあつたらたのみますよ」學問の尊嚴さと云う事にこれ程迄謙虚な立場でつき當つた彼の姿が浮んで來ます。唐代の禪の發展についてもよく精通して居つた彼の努力には敬服の念に滿たされて話し合つた事等今更の様に思ひ起されて來ます。

教室に於ける桑山君

同期生（大島）　大庭實

冬のどんより曇つた金曜日の七時間目の振鈴が鈍く響く、こんな寒いのに後二時間授業がある。重い足を教室へ運ぶと、後ろから「大庭君」と例の大きな桑山君の呼び聲である「寒いなあ東洋史演習分るかい」「俺も余り分らないが考える所があるのだ」こんな話をし乍ら薄暗い教室に入る。この時間は吉田金一先生の東洋史演習で學生は私と桑山君の二人である。この時間はいたずらが出來ない、ただ鉛筆を握つて清朝道光帝、阿片戰爭とノートをうずめて行く。ふと隣りの桑山君を見るとノートも取らず何か考えているらしい。鉛筆でノートを取るように促すと、急に立つて先生に質問を始めている。阿片戰爭の意義はどこにあるのですか清朝は阿片戰爭が避けられなかつたですか等と盛んにやつている。桑山君は自分の疑問は、必ず解決させようと言う情熱家であつた。今になるとあの舊館一階の薄暗い教室でたつた二人で學び語つた時が懐しく蘇がえつてくる。

雪景色の日に別れた友

同期生（秋田）　下孝雄

昭和廿四年四月の或る日、百十五番教室に坊主刈の學生が机に向い眞劍にノート整理に勵んでゐた。彼こそ、今はなき桑山君であつた。彼との一番の思ひ出は廿八年二月に藤井先生宅で開かれた卒業謝恩會の歸途の事である。終電に間に合はず仕方なく宿を求めて降りしきる雪の中を彷徨い歩き、漸く小さな旅館に辿り着いた。やつと落付いた氣分で風呂に浸り學生生活の最後の垢を落して床に入り、

未來の抱負を談じた。彼はあの獨特な句調で將來を語り又、學問を論じ時のたつのも忘れて數時間語り合つた。翌朝は一点の雲もない上天氣で、眩く光る雪景色の町を晴れ〳〵とした氣分で雪を踏みつゝ驛迄歩き、再會を約束して別れたのであつた。此れが私にとつては最後の思ひ出となつてしまつた。かうした良友を失つた事は痛惜にたへない、併し故人の意志は我等同期生が継がう。桑山君の靈に冥福多からん事を祈る。

桑山君との二時間の思ひ出

同期生（東京）　西　幸保

入学以來四年間の課程を終り卒業を祝うグラスの虹と共に各々の成功を祈つて別れた。其の後昨年八月、僕の寺の手不足から桑山君にもし都合がよければ年内だけでも手伝つて欲いと手紙を出し、桑山君から返事があり八月末に澁谷であふ事になつた。その時は僕の方が先であつた。やがて彼と會ひ色々と話をし乍ら澁谷駅地下の日本食堂に入りビールをのみ乍ら話あつた。桑山君は自分も教員として就職したく思ひ、その手續きをとつたがこれと云つて現在は就職先があるわけではないとの事であつた。そこで僕の寺の事情を話し、もし都合ついたらすこしの間でもいいから手伝つて欲い事を告げると、心よく承知して呉れた。そこで重ねて桑山君にもし突然に就職先が極つたらその時は僕の家の都合なんかは氣にする事なく帰つて呉れて結好だと話をした。丁度午後三時頃であつたが、それから映画をみやうと云つたが彼はえらく遠慮をしていたが無理に一緒に映画をみた。そこを出て喫茶店でコーヒーをのみ又色々とよくお願ひをし、暮れゆく澁谷驛で別れた。かうして二時間彼と共に過した。その後手紙で二回位連絡をとり九月六日午後七時五分の上野発青森行の急行で出発して貰ふ事になつた。その日は上野驛へ彼を見送りに行き、向ふでの事を色々と話し室蘭は横須賀とは氣候も違ふし町の様子も話して呉々も氣をつけて旅行される様頼んで別れた。

秋の空には早くも夕闇が迫り晴れた空には、夕映えがてりはえ上野の山は一段と美しく秋を思はせる夕方であつた。今にして考えると、上野驛で桑山君を送つたのが最後の談笑にならうとは、全く神ならぬ身の知るよしもなかつた。彼との在學中での思ひ出は澤山ある。然し僕はそれらの事よりも今腦裡にあるものはビールをのみながらの二時間である。桑山君は其の時何を考へてゐたか、前途の人生航路の計画であつたか、旅のつれ〳〵の樂しみであつたか、はたまた幼少の、大學の、本山での、思ひ出であつたらうか。それを思う時澁谷での二時間が繪卷物の様に目がしらをかすめていく。

ありし日の和尚様

同期生（東京）　安本利正

北の海に儚なく散れる身なれども今蓮華座に微笑みてあらむ。

曾ての良晃和尚を回想し乍ら今淨土界にあるを想ふと、斯様な姿が目に浮んで來る程、和尚様は善良質朴な人柄であつた（桑山君、再び君を和尚様と呼ばせてくれ給へ、君の愛稱でもあつた程私達には親しみ深い呼び名であれば）私との交友は五ヶ年計りであつたが、親しく往來させて頂いた。彼は今後の佛教に非常な關心を抱いて度々論じた。自分の意見を繰返し〳〵述べ、どうかして人を納得させねば氣がすまないと云ふ氣質の人であつた。私の分らない處は細微に渡つて説明してくれ、何時迄も話が盡きずに夜明けを迎へた事も